

歴史記述に於ける境界

— エスノヒストリーとアゼルバイジャンの解体

北川誠一

本稿は、1994年1月、国際問題研究所で開催された同研究所とイギリス王立国際問題研究所 (RIIA) との共同研究会「ポスト・ソ連の周辺：ウクライナ、トランスコーカサス、中央アジアおよび極東」の発表原稿 (Internal Affairs and Eth-nic Conflicts in the Trans-Caucasia — Disintegration of the Soviet Re-publics; The Case of Azerbaijan) を和訳し、補正、増補を加えたものである。なお、当日発表された原稿は、GIIA Paper, 1994, No. 8, pp. 55-61 に発表されている。

1 アゼルバイジャンの解体。

1-1 アゼルバイジャン人の自己意識。

ナヒチェヴァン自治共和国を除く今日のアゼルバイジャン共和国の領域は、歴史的アゼルバイジャンの範囲には、含まれていなかった。ナヒチェヴァン Nakhchevan は、アラス川の左岸にありながら、タブリーズ地方と関係が深く、アルメニアの伝統的地理区分でも、ドヴィン Dvin、イエレヴァン Yerevan のあるアララット Ararrat 州ではなく、ヴァン湖東岸と同じヴァスプラカン Vaspurakan 州に属していた。アラス川とコーカサス山脈に挟まれたアゼルバイジャン共和国の主要部分は、中世にはアゼルバイジャン第二の都市ギャンジャ Gyanja (Janza) を中心とするアッラーン Arran、バクーがその一部であるシールヴァーン、現イラン領にまたがる平地のムガーン Mughan、シールヴァーン Shirvan とムガーンの間をグーシュタースフィー Gushtasfi 等個々の名称で知られていて、地名としては、それらの全てを合わせる単一の地名はなかった。中世にこれらの地域がアゼルバイジャンの一部に含められる場合があるとすれば、単にこれらの地方が本来のアゼルバイジャンと同一の支配者によって統治されていたときである。

この地域住民のトルコ化およびトルコ語を話す人々のシーア派イスラーム教化のかなり後になって、19世紀には、知識人の一部にアラス川の北（現在のアゼルバイジャン共和国）と南（イラン領アゼルバイジャン）のトルコ語を用いるイスラーム教徒住民は、単一不可分の民族で、アゼルバイジャン人と呼ばれるべきであるという主張が見られるようになった。このような近代的な民族同一性を最も早く唱えたのは、小説家ムハンマド・シュレイマノフ Muhammad Suleimanov で、彼は1891年新聞カシュクル Kashkul (1880年ジャラルール・ウンスイザーデ Jalal Unsizade によって発刊された進歩的雑誌のちに新聞) で、ロシア領とイラン領に分断され、民族的アイデンティティーが混乱し

ていたロシア領ザカフカースのムスリムに対して、「貴方がたは、何故、自分自身をアゼルバイジャン・トルコ人と呼ぶ事によって、貴方がたの（アイデンティティー）のジレンマを解決しないのですか」と呼びかけいる。このような発想は、シュレイマノフただ一人のものではなく、他の人々と共有のものであって、ウンスイザーデ自身が、『アゼルバイジャン』という名称の新聞の発刊を計画していた。また、同年マメド・アガ・シャフタフティンスキーMamed Agha Shah-tahtinskijは、雑誌『カスピKaspi』で、「ザカフカースのムスリムを何と呼ぶか」という論文を掲載し、「近年、ロシア語で、『タタール』とい名称が使われだしているが、ザカフカースのトルコ人と内地のタタール人には、言語、外見、習慣の面にわたってかなりの隔りがあるので、適切な名称とはいえない。ザカフカースのムスリムの言葉は、オスマン、セルジューク、アデルベジャン（＝アゼルバイジャン）の大きな方言に別れるトルコ語に関わっている。まして、ザカフカースのトルコ人は、イラン人ではない。これらの人々は、言葉によって互いに区別されるが、トルコ語とペルシア語は、全く異なっている。ザカフカースのムスリムは、アデルバイジャン人、彼らの言葉はアデルバイジャン語と呼ぶのが全く好ましい」と述べた。これまで、凡トルコ主義的傾向のあるジャディード主義に隠れて、あまり注目されていなかった、トビリシとバクーを活動の舞台としたザカフカースの進歩的ムスリムのなかで、アゼルバイジャンという名称によるアイデンティティー確立の努力がなされていたのである。。

この様な流れを受けて、アラクス川からコーカサス山脈までのザカフカース東部を「アゼルバイジャン」と呼ぶ最初の公的な試みは、1918年共和国として新たに独立したこの地域を「アゼルバイジャン民主共和国」とする命名であった。1920年赤軍のバクー入城後、成立したソヴィエト政権もそのままこの国名を採用した。ただ、民族名称はアゼリ・トルコ人とされ（あるいは、単にトルコ人）とされた。民族名称としてアゼルバイジャン人が採用されたのは、1936年、スターリンの命令によってであった。アゼルバイジャンという概念は、アゼルバイジャンの領域にすむあらゆるエスニック集団統合の理念として用いられたのである。

1-2 アゼルバイジャンの多民族的性格。

ロシア政府がザカフカースで行った1897年の国勢調査によるとアゼルバイジャン・トルコ人は、バクー県の人口の60%、エリザベット県の62%、ナヒチェヴァン郡の64%を占めた。ザカフカース全体では29.2%であった。ほぼ百年後の1989年調査では、アゼルバイジャンの79%が、アゼルバイジャン人であった。すなわち、アゼルバイジャンの20-40%が、非アゼルバイジャン人であるという結果になる。その内、ロシア人とアルメニア人は、アゼルバイジャン人マジョリティーの中に同化されるのを拒否したが、アゼルバイジャン政府は、その他の少数集団とは常に微妙な問題を抱えていた。

ここでは、ターレシュ(Talesh, Talysh)、レズギン (Lezgi, Lezgin)、クルド問題について概略を示そう。イラン語に属するターレシュ語を母語とするターレシュ人は、アゼルバイジャン東南部のアスタラ(Astara)、レンコラン(Lenkoran)、レリック(Lerik)、マサリ(MAsalli)郡に集中し、1931年センサスによるとそれぞれ郡人口の、86.4%、86.3%、82.4%、30.1%を占めた。1989年センサスでは、2万2千人のターレシュ人口が報告されている。しかし、別の情報では、アゼルバイジャンのターレシュ人口は15万人を超えるという。同名の集団は、国境を挟んだイラン領にも分布しているが、イランでは、彼らの使用言語のトルコ語化と信仰のシーア化の程度とが、一致するが、ターレシュ地方はイランではスンニー派信仰の牙城でもある。恐らくアゼルバイジャンのターレシュ地域でもこのような事情があるであろう。1919年ターレシュ・ムガン・ソヴィエト共和国の建国が宣言されたが、ソヴィエト・アゼルバイジャン成立後、彼らの自治権は承認されず、以後民族的自治権を獲得しようとする運動は、弾圧を受けた。ソ連崩壊後の1993年にアリアクラム・グンバトフAliakram Gumbatovの指導するターレシュ・ムガン共和国が宣言されたが、グンバトフによるとアゼルバイジャンのターレシュ人口は、百万人に達するという。グンバトフの主導する運動は厳密には分離主義ではなく、アゼルバイジャン共和国内での自治の獲得だが、ソヴィエト時代には彼らの民族的権利は一切否定され、彼らのための学校、ラジオ、新聞等はなかった。アゼルバイジャン政府はその理由を彼らは既にアゼルバイジャン人に同化し、言語的にもバイリンガルであるからであると説明していた。この状況はペレストロイカ以降も変化を見なかった。

アゼルバイジャンのダゲスタンよりの地域には、公式資料では17万4千人のレズギ人が住む。この内90%以上がレズギ語を母語とするものである。彼らの一部はシーア派であるが、大部分はスンニー派である。非公式資料では、アゼルバイジャン内のレズギ人口は、80万人を超えるという。彼らの為にも、劇場、ラジオ、新聞、学校はない。ロシア連邦の共和国であるダゲスタン南部には、さらに多くのレズギン人が住み(1989年公式統計によると全人口は、46万6千人)、統一と民族的領土の創設の気運が生じている。アゼルバイジャンのレズギ人はバクー政府に対してかなりラジカルな感情を抱いており、1993年にダゲスタンで開かれた民族大会では、武力闘争さえ主張された。1992年から1993年のアブハジア・グルジア戦争でアブハジア側に多数の義勇兵を送ったコーカサス山地民族同盟のムサ・シャニーボフMusa Shanibov議長もレズギ人に対する指示を表明し、必要とあれば、武力援助を行うことを宣言している。

アゼルバイジャンには、若干のクルド人がある。彼らはかつてアルメニアと山岳ガラバグの間にラチンLachinを中心とするキュルディスタンKyurdistan自治区を与えられていたが、これは後に撤廃された。かなりのクルド人が強制移住の処置をうけ、現在その一部は、北コーカサスのクラスノダルKrasnodar地方に居住しているが、当地のロシア人に圧迫を受けていると感じている。ペレストロイカ以降、クルド人も民族的権利の擁護のために立ち上がったが、彼らの

第一の目標は、キュルディスタン自治区の復興である。一方、ナヒチチヴァン（自治）共和国では、西南部のシャルールSharur地区にクルド人集落があるが、1994年夏には、トルコ、アゼルバイジャン両国の特務機関が襲撃する事件が起こった。アルメニア側のは発表では、1993年アルメニア人が、ラチンLachin回廊を占領した際、クルド人はアルメニア指示を表明したというし、トルコ側情報によるとアルメニアは、トルコ領キュルディスタンで、抵抗運動を続けているクルド労働党を援助しているという。アゼルバイジャンにおいては、ターレシュやレズギだけでなく、クルド人の問題も国内問題ではなく、国家間の問題であるのである。これらのなかで最も深刻であるのは、山岳ガラバグの帰属を巡るアルメニアとの戦争であるが、重要な事はアゼルバイジャンの抱える民族問題はそれだけではないということである。

ソヴィエト政府は常にトルコ系住民の凡トルコ主義的運動に対する注意を怠らなかったが、アゼルバイジャン民族主義は、限界を超えなければ、大目に見られていた。。科学アカデミー版『アゼルバイジャン史』（バクー、1958）では、トルコ系民族集団のザカフカース移住を五世紀から七世紀のフンとハザールの時代においているが、この次の世代に属する歴史家達は、この点について、時代を遡る傾向にある。『シルヴァンシャー国家』（1983、バクー）の著者サラ・アシュルベイリは、アゼルバイジャンにおけるトルコの要素の起源を三世紀のフン族の侵入に求め、六世紀には、トルコ系住民は今日のアゼルバイジャンのあらゆる地域に居住していたとし、「アッラーン」のようなアゼルバイジャンの地名の語源もトルコ語に求めている。ペレストロイカ以降、この傾向は極端になり、シュメール語をアゼルバイジャン語と関係付けたり、トルコ系住民の移住を2500-3000年前に比定するような、非常識な主張が見えるようになった。また、このような「歴史家」達は、素人地名学にも手を染め出し、シルヴァンShiarvan、バクーBaku、アッラーンArran、ザンゲゾルZangezoz、ナヒチェヴァンNakhchevan等のアゼルバイジャンの古い地名の多くをアゼルバイジャン語で解釈しようとした。これらは、30-60年代にトルコ共和国で一世を風靡した偽歴史学の垂流であるが、バクー中東民族研究所のプニヤトフ所長は、このような言説を凡トルコ主義傾向であると警告している。。旧ソ連の他の共和国と同じく、アゼルバイジャンにおいても民族主義的な歴史学の潮流が強化したのである。アゼルバイジャンにおいては、アゼルバイジャン人としてのアイデンティティーを否定し、アゼリ・トルコ人であると主張するものも多くなったが、民族戦線のリダーの一人で、後に大統領に選出されたエルチベイElchibeiもその一人であった。この自己規定は、ソ連時代に禁止されていた凡トルコ主義的風潮と関係があるが、これもまた領域的国民国家としてのアゼルバイジャンの解体で要素の一つなのである。

2 アゼルバイジャンにおける国民統合の理論。

ソ連時代アゼルバイジャンという国名の採用は、国民統合の手段であった。アゼルバイジャン科学アカデミー会員のズィヤー・ブニャトフ Ziya Bunyatov は、既に六世紀に南北アゼルバイジャンは、単一の領域として統合されており、八世紀以降はアラブやペルシア語の文献の中で、アゼルバイジャンとして知られていたと主張する。恐らく、今日のアゼルバイジャン人の祖先の一部は、コーカサスの古い種族であり、古代の歴史的記録しその名をとどめているが、1985年の共和国史では、アゼルバイジャンの最古の種族として南アゼルバイジャンすなわちイラン領アゼルバイジャンのマナイ、メディア、アトラパタネを挙げている。通例アゼルバイジャンの語源は、このアトラパタネに当てられることが多いが、アゼルバイジャン共和国の領域は、アトラパタネには含まれていなかった。また、メディアもアトラパタネも言語はイラン系であったと考えられている。元来イラン系であった南アゼルバイジャン住民の言語はやがてトルコ化され、さらに後に南北アゼルバイジャン住民の信仰がシーア化されるに至って、単一のエスニック集団となるが、『アゼルバイジャン国家サファヴィー朝』の著者オクタイ・エフェンディエフ Oktai Efendief によると、アゼルバイジャンはサファヴィー朝の成立と共に統合されたのである。一方、このような考え方は、イランの歴史家からは、強く反駁されることになる。

次に、アゼルバイジャン人歴史学者は、マナイ、メディア、アトラパタネと並んで、コーカサス・アルバニア Albania にも歴史的起源を求めようとする。1960年代にこの新しいアゼルバイジャン人起源論の学説が現れた。この説によると現在のアゼルバイジャン人は、最初イスラーム化され、ついでトルコ語を用いる事になる古代・中世のアルバニア人の直接の子孫である。

2-1 コーカサス・アルバニア

ギリシャとローマの文献には、現在のアゼルバイジャンの領域にアルバニアと言う国家が存在していた事が述べられている。これについて述べた最初の著者はアリアヌス Arrianus で、それによるとアルバニア王は、ペルシャの大王の陣営に加わって、マケドニアのアレキサンダー大王と戦っている。この民族は後に、アルメニア語文献のなかにアグヴァン Aghvan 人として知られるようになる。このようにして、アルバニアとアルバニアは、ヨーロッパではよく知られていたが、アラビア語とペルシア語トルコ語文献では、この古代国家については全く何も記されていない。19世紀にアブバスクリ・バキハノフ Abbas Quli Bakikhanov が自著『エラムの花園』で、古典文献によってアルバニアとアルバニア人の存在を紹介しているが、それと彼の時代のアゼルバイジャン、アゼルバイジャン人との関係については、沈黙を守っている。当時のアゼルバイジャン系住民は、アルバニアに関する伝承は何も持っていなかったのである。アゼルバイジャン最初の系統的かつ公的な通史である1958年版『アゼルバイジャン史』も、両者を結び付けようとする格別の意図は示していない。同書では、単にアゼルバイジャン北部とダゲスタンの主要部は、古代アルバニアと呼ばれていたと記

されているだけである。

2-2 対アルメニア紛争。

1959年、前述のズィヤ・ブニャトフは、アゼルバイジャン科学アカデミーの紀要に、九世紀にアラブ帝国に対して反乱を起こしたホッラム教団の有名な指導者であるバーベクBabekが、「シャッキShakkiの領主で、アルバニア王(Batrik al-Ran)サフル・イブン・スムバトSahl b. Sumbat」と領地を経由してビザンツ領へ逃亡したことに関する論文を発表した。伝統的にはシャッキは、クル川左岸コーカサス山麓にある都市であると考えられているが、ブニャトフは、これをザングゾル地方の村落に比定した。今日アルメニア共和国南部、イラン国境を望む地方である。7世紀に書かれたあるアルメニアの地理書によるとシャッキは元来大アルメニアに属していたが、後にアルバニアに併合されたとある。この場合にはシャッキはクル川の左岸に求めなければならない。そして、クル川右岸は、ある時までアルメニア領であったがある時からアルバニア領になったという、歴史的事実に合致している。ところがブニャトフは、更に南のザングズルが、アルバニア領であり、この地の領主がアルバニア王の称号を持っていたとするのである。この論文は、他の多くの研究と共に『七世紀から九世紀までのアゼルバイジャン』（バクー、1965年）にまとめ上げられた。この書は、アルメニア、アゼルバイジャン両国研究者の間に深刻な論争の出発点になった。ブニャトフの研究がアルメニアとアゼルバイジャンの歴史地理、特にその境界について、全く新しい理解をもたらしたからである。

a) アルバニア教会。

アルバニア王ウルナイルUrnairのキリスト教化の後、アルバニアにもアルメニアやグルジア同様の国民教会が組織された。教会ではアルバニア語とアルバニア語アルファベットが用いられていたと考えられている。325年のニケーア公会議、552年のドヴィンDvin司教会議に於いては、アルバニアの聖職者は、アルメニア、グルジアの聖職者と共に451年に決定されたカルケドン教条に反対した。しかし、後にグルジア人は、カルケドン教条に移り、アルバニアもシリア人教父の影響下に入った。これは、三者の間に深刻な、教義、組織対立が生じていたことを意味する。アラブ人の支配後、アルメニアのカトリコス・エチミアヅィンEchimiadzinのイリヤIliyaは、カリフ・アブドルメリクAbd al-Makikの助力を得て、この問題に解決を得ようとし、アルバニア人のカトリコスを逮捕し、アルバニア語で書かれたあらゆる宗教的文献を破棄した。その再多くのアルバニア人君侯がダマスクスへつれ去られた。ブニャトフは、貴重なアルバニア語文献が永遠に失われ、政治的エリートがいなくなったため、アルバニア国家を弱体化したと述べる。

この主張に対するアルメニア人研究者の反応は速かった。直ちに書評の形式で反対意見が表明された。このクーデターが、アルバニア教会のアルメニア化を導いたことは事実であろうが、著者は

教会組織の争いを民族同士の紛争であるかのように主張し、あたかもアルメニア人がアゼルバイジャン人の仇敵であるかのように記述して、民族友好の精神を損ねていると主張した。

b) アルバニア文学。

アルバニアではキリスト教化の後、モヴセス・カガンカトヴァツィ Movses Kaghankatovatsiの記す伝説によるとマシュトツMashtotsによって、アルバニア語アルファベットが作られた。最近、アルメニアでこのアルバニア語アルファベットが発見され、アゼルバイジャン北東部ミンゲナウルMingenaur人工湖工事予定地からは、アルバニア語碑文も発見され、アルバニア語文献の存在が確認された。ブニャトフ氏が主張する第二の論点は、それまでアルメニア人と考えられていた著名な著述家、カガンカトヴァツィ、キラコス・ガンツァケツツィKirakos Gandzakttsi、ムヒタル・ゴシユMukhitar Gosh、ダヴティクDavitik等はアルバニア人であって、彼らの作品は元来アルバニア語で書かれたが、アルメニア語に翻訳された後原本は失われたとするものである。また、ウディン語の研究者グカシヤンGukasiyanは、カガンカトヴァツィのアルメニア語テキストと調査し、この作品の原文はアルバニア語であるという結論に達した。アルメニア人研究者は、これらの主張には納得せず、特にカガンカトヴァツィに見られる特徴的要素が、ウディン語によるものか、アルメニア語の地方的要素であるかについて議論が集中した。また、中世期におけるアルバニア語の残存についても、議論が行われた。ブニャトフは、アラブ語地理書に見えるアッラーン語、ギリシャ語文献のなかにみえるザンゲゾルのシウニクSiunik語をアルバニア語であると判断した。アルメニア人研究者は、アッラーン語はイラン語、シウニク語はアルメニア語の方言であると主張した。

c) アラス川左岸領有問題。

アルメニア人研究者は、シャッキのサフル・イブン・スンバトをアルバニア人であるとするブニャトフの結論に反対するが、のみならずアラス川左岸クティシュKutish、バルサンBarsan、バイラカンBailaqan、アルツァフ＝ハチェンArtsakh Khachen、ウティUti、有名なメフランMehran家のガルドマンGardman、及びクル川左岸のシェッキ、カバラQabalaの君侯はすべてアルメニア人であると主張している。一方、アゼルバイジャン側は、アラス川左岸にアルバニアの残存物を探そうとし、ネアモトヴァNeamotovaは、ザンゲゾルのスイスィアンSisianに「アグヴァン人」と記された、碑文を発見したと報告し、アリエフAliefもこの地域にアルバニアの教会の遺跡を発見したと称した。

80年代に論争は活発化し、マメドヴァF.Mamedovaが、アルバニア人は国家形成を終了しており、領土はナヒチェヴァンに広がり、カガンカトヴァツィとダヴィティクの原文はアルバニア語で書かれたと主張した。ムヒタルとキラコスは、アルメニア語を用いたが、その精神において彼らはアルバニア人であるとした。論争が進むに連れ、両者の言葉使いは、次第に激烈になっていった。

2-3 対グルジア紛争。

グルジアとアゼルバイジャンは、相互に民族的紛争の可能性となる地域を抱えている。グルジア南部にはアゼルバイジャン人が集中して居住するマルネウリMarnruli郡があるし、アゼルバイジャン北西部には、グルジア人ムスリム（シーア派）が多い、ザカタルZakatala郡があるからである。

ギリシャ、ローマの古典文献には、アルバニア人の土地は、西はイベリア（グルジア）人の土地と接しているとある。一報、中世のグルジア語文献では、古代アルバニアの首都カバラを含むアルバニアの中央が、グルジア王国の一部であるとされている。この点に関して、両国歴史学者の意見は異なっている。これが、アルバニア問題の第二の戦線となっている。1982年、テンギス・パティアシュヴィリTengis Patiashviliは、『ランRan人とカヒKakhi人の王国』（トピリスイ）を出版し、八世紀の50-60年代に、古いカヘティ王国はクシェティKusheti、ヘレティHereti、ツヘティTskheti、およびシャッキを含んでいた。この内カヘティの東隣のヘレティは10世紀初カヘティから分離され、その王は「ラン人の王」と称された。11世紀にヘレティが再びカヘティ王国に編入されるとカヘティ王は、ヘレティ王の称号を合わせて「カヒ人とラン人」の王を称するようになる。1040年ダヴィティ三世が、グルジアを統一すると、このラン人の王という称号も、彼に付与された。ヘレティの住民は起源的には、グルジア系ではなく、ダゲスタン系であると考えられるが、アゼルバイジャン人歴史学者の共通見解は、グルジア人のいうヘレティは、アルバニアの一部である。古代アルバニアの首都であるカバラは、シャッキの近くにあったからである。従って、中世シャッキの住民は、グルジア化された（正教徒の）アルバニア人であるとされる。

さらに、ダヴィド・ムスヘシュヴィリDavidi Muskheshviliは自著『東グルジアの歴史地理から一シャッキとゴガレナGogarena』（トピリスイ、1982）で、最初にストラボンが述べ、中世のグルジア人がガチャニGachani あるいはガルダバニGardabaniと呼ぶゴガレナをイベリア（すなわちグルジア）の一部であるとのべ、この地は二世紀にアルメニアに併合され、四世紀にはグルジア領になったが、住民のゴガルGogar族は、グルジア系であると主張する。ヘレティに関するムスヘシュヴィリの見解は、シャッキを首都とするヘレティはアルバニアの最も西の地域だが、10世紀にグルジア人によってキリスト教化され、11世紀には政治的にも、言語的にもグルジア化されたとする。同時代のグルジア資料では、パティアシュヴィリの見解と同じく、ラン人とカヒ人の王国と呼ばれ、アラブ資料では、シャッキとジュルザンJurzanとよばれた。グルジア統一の後この地域はカヘティ、ヘレティ、シャッキに三分割され、それぞれの領主によって統治された。しかし、マメドヴァは、ムスヘシュヴィリはアルバニアからシャッキとカンピセネをアルバニアから奪ったと、これを批判し、

ストラボンがカンピセネCanbiseneがアルバニア領であると明言しており、シャッキは古代アルバニアの首都であると反駁した。マメドヴァの見解は正しいであろうが、中世グルジアではシャキとカバラはグルジア王権に強く結ばれた地域である。

アゼルバイジャンのゲイブッラーイエフGeibullajevは、アゼルバイジャン人がアルバニア人の正統な後継者であり、ザカタラ係争地はアゼルバイジャン領であるとするアゼルバイジャンの主張と敵対する、中世グルジアの境界を拡大しようとする誘惑に負けがちなグルジア人歴史学者の傾向を批判した。彼の著書『アゼルバイジャンの地名』（バクー、1986）今日グルジア語の方言を話すインギルIngil族は、ストラボンの言うゲルGel族で、グルジア化したアルバニア人である。パティアシュヴィリによる書評に反駁して、さらに、今日のサインギロSaingiloのキリスト教徒住民は、17世紀にゲロイGeloiと呼ばれていた。彼らはイスラム化したの地新しいゲロイ、すなわちイエニゲロイYeni Geloiと呼ばれたが、やがてムスリムだけでなくキリスト教徒もインギルとよばれるようになった。ゲイブッラーイエフの論拠は、インギルが、近隣のアゼルバイジャン、アヴァルAvar、ツアフルTsakhul人によって、それぞれゲロイGeloi、ゲラヴGelav、ゲロウGelouと呼ばれていることである。さらに、彼は中世グルジア文献に見える「ヘルHer人」は、ストラボンの「ゲル」人の子孫であり、現在のクリズKuriz人、ハプティルKhaptir人の祖先である。彼らは、ヘルナHernaから今日の住地に移住したとす伝承を持つが、ヘルナは、歴史的ヘレティのフランタHtantaまたはヘルナブジュHernabujであるとされる。パティアシュヴィリにたいするゲイブッラーの批判の第二の点は、ヘレティがグルジアの分かれがた一部であるとし、ヌハNukhaをグルジアの一部であると述べ、シルヴァンが中世グルジア教会の指導下にあったとする点であった。

結論

我々は、ここでカフカースの諸国家の公認・非公認の歴史記述の論争を整理し、歴史地理上の地域や国家間の境界と現実に機能している歴史イデオロギー上の境界を対比した。この境界は、通過することによって他者の理解に導かない不毛の境界であった。

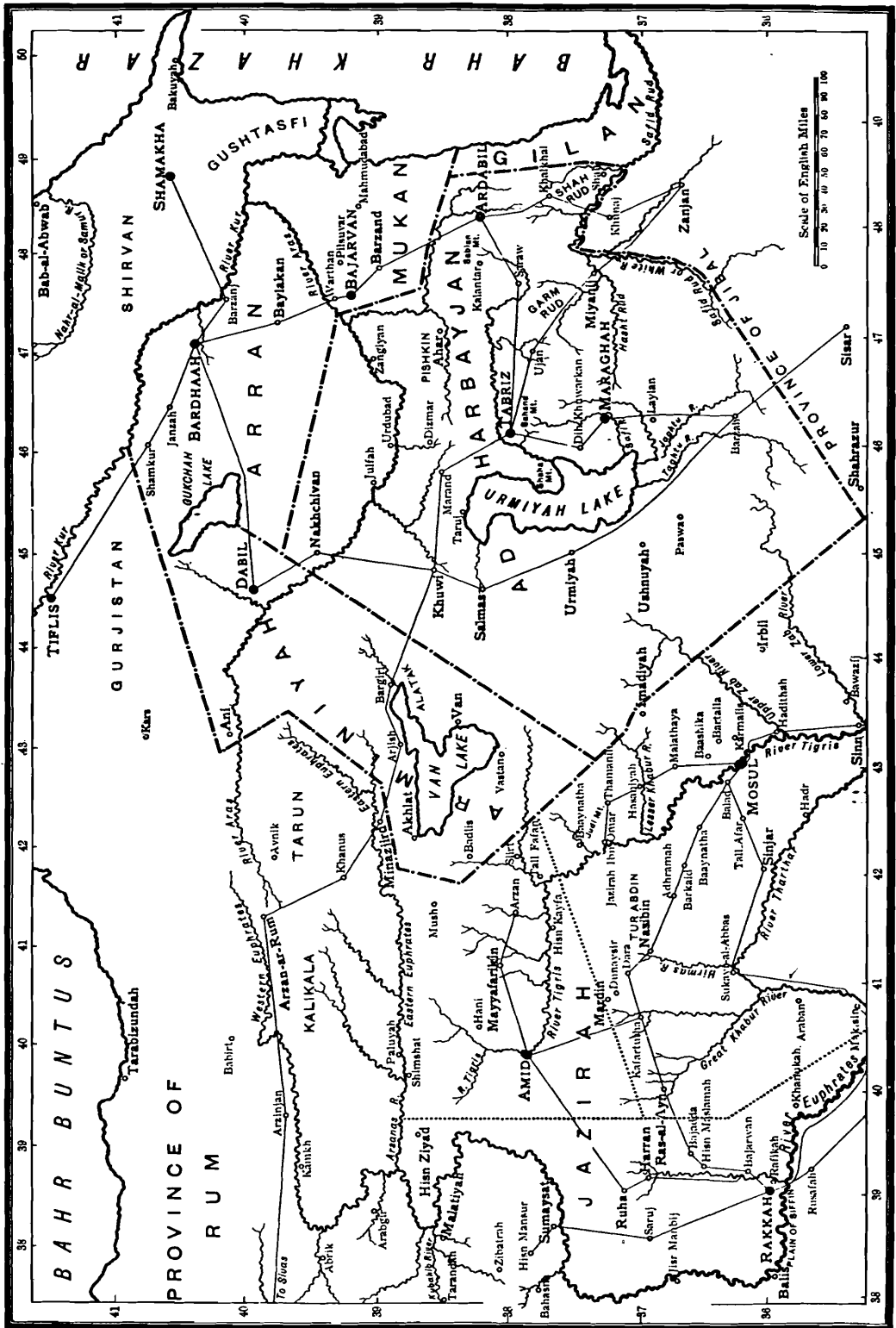
自らを古代、中世初期のアルバニア人の領土の正当な後継者であるとするアゼルバイジャンが、共和国の内部にすむレズギ人にその権利を分かつたないのは、全く不自然であろう。共和国北部に住むレズギ人の言語は言語的にはアルバニア語に非常に近いからである。また、アルバニア教会は教義と用語においてアルメニア化したことは、先に述べたが、組織としてのアルバニア教会は19世紀まで存続した（総大主教座は、13世紀にギャンジェGyanjeからカラバグ山中のガンザサルGanzasarに移転された）。19世紀の大移住依然にアゼルバイジャン各地（コーカサス山脈南麓や山岳カラバグ）に住んでいたアルメニアは、中世のアルバニア人の一部の子孫であると想定される。アルメニ

ア人の多くは、ギリシャ、ローマ古典中のアルバニアの南境をクル川とみなす。同河左岸はアルバニア固有の領土であるが、右岸はアルメニアの歴史的領土であると考えるのである。山岳カラバグのみならず北に隣接する丘陵をアルメニアの一部であるアルツアフであると主張する根拠はここにあるのだが、レズギ人も少数者の権利の理念によってだけではなく、歴史的正当性によって、分離と独立を主張するようになるであろう。ターレシュ人の歴史的権利に対する主張の声は、小さいが、彼らはアゼルバイジャン国史の最初のページに記述されるメディア、アトラパテネが、自分達の祖先であることを意識している。アゼルバイジャン史のなかのイラン的要素も、さらに求められるであろう。

参考文献

- 北川誠一「ザカフカースにおける歴史学と政治--アルバニア問題を巡って」 『ソ連研究』 第11号, 1990年10月106-130
- Akademija Nauk Azerbajdžanckoj SSR, Istorija Azerbajdžhana, v trjokh tomakh, 1958-1963
- Alijev, L., Kavkazskaja Albanija, Baku, 1984
- Altstadt, A.L., The Azerbaijani Turks--Power and Identity under Russian Rule, Stanford, 1992
- Ashulbeili, C., Gosudarstvo Shirvanshakhov(VI-XVI), Baku, 1983
- Bunjatov, V.M., Azerbajdžhan v VII-lX vv., Baku, 1965
- Efendijev, O., Azerbajdžhanskoe Gosudarstvo Sefevidov v XVI beke, Baku, 1981
- Gejbullajev, G., Toponimija Azerbajdžhana, Baku, 1986
- Mamedova, F., Istorija Alban Moiseja Kalankatujnskogo kak istochnik po obshshestvennomu ctroyu rannecredevekoj Albanii, Baku, 1977
- Muskheshvili, D.L., Iz Istoriceskoj geografii vostochnoj Gruzii(Shakki i Gogarena), Tbilisi, 1982
- Nejmatova, M.C., Memorial'nye Pamjatniki Azerbajdžhana XII-XIX beka, Baku, 1981
- Papuashvili, T'., Rant'a da Kahet'a Samep'o(VIII-XXI ss.) T'bilisi, 1982
- Swietochowski, Tadeusz, Russian Azerbaijan, 1905-1920--The Shaping of National Identity in a Muslim Community, Cambridge, 1985

MAP III



PROVINCES OF THE NORTH-WEST FRONTIER, WITH JAZIRAH AND ADHARBAYJAN

(By Le Strange)